町報

おぶせ

OBUSE TOWN
PUBLIC RELATIONS
MAGAZINE

おぶせ自然暦100回記念 特別号

OBUSE NATURAL CALENDAR
SPECIAL EDITION 2020



町報おぶせ「おぶせ自然暦 100 回記念 特別号」発行に寄せて



小布施町長
市村良三

栗ガ丘の自然案内人、清水照雄先生に平成24年から町報おぶせにご寄稿いただいている「おぶせ自然暦」が令和２年７月号をもちまして100回を迎えることとなりました。清水先生におかれましては９年間の長期にわたり連載をいただいていることに感謝と御礼を申し上げます。

小布施町は「栗と北斎と花のまち」のキャッチフレーズが示すとおり、花のまちづくりに力を入れてまいりました。令和２年に策定した「第六次小布施町総合計画」では、基本理念のひとつとして「都市と農村の良さを大切にする」ことを掲げ、都市のすぐそばにある美しい農村風景を大切にしたまちづくりの推進を目指しています。オープンガーデンやフラワーハンギングバスケット、自治会花壇といった都市的な花を活用したまちづくりに対し、清水先生には「おぶせ自然暦」を通じて、小布施町が持つ農村的な、本来ある自然の花を愛し、残していくことの大切さを伝えていただいています。

昨秋の台風災害や新型コロナウイルスの流行など、大変な状況がこの小布施町を襲っています。しかしながら、私たちがこの町の歴史を振り返ると、そこにはいつも困難がありました。千曲川は度々大きな氾らんを起こし人々を苦しめてきましたし、また、松川も同様に暴れ川でありました。さらに松川は日本でも珍しい酸性の川であり、それを使った農業（主として米）は、生産性も低かったので、さまざまな作物転換をはかったり、対策事業で一歩ずつ乗り越えてきたのであります。小布施の先人の皆さんが、あきらめずに創意と工夫と知恵で乗り越えてこられた精神は、今の私たち小布施人にも深く継承されていると信じております。

私たちの町、そして小布施人は古来、外部からのお客様（客人）の皆さんを大切にして参りました。客人を代表するような人々、例えば葛飾北斎翁や林柳波先生、中島清之画伯などもその時代の困難を背負った先生方でありました。北斎翁は天保の改革で、江戸での創作が難しくなり、鴻山先生の招きでこの地に逗留しましたし、時代が下って柳波先生や清之画伯などは戦争の惨禍を逃れてこの地に疎開されてきた先生方でありますが、困難に負けずに小布施の皆さんと一緒に後の文化の礎となっていただきました。こうした客人の皆さんも、小布施の自然や小さな花々に慰められたと思います。

清水先生に第１回目のロトウザクラの記事をご寄稿いただいた平成24年は第１回小布施若者会議を開催した年でもあります。平成24年４月号の町角エッセイで私は、「小布施町はいわゆる観光の町ではなく、本来日本人が持つ親切さが小布施の皆さんに溢れているからこの町を何度も訪れていただける―優しさや親切さを基にさらに住みやすい町を作っていくことで新たにお若い人の町への定住を進めることができるのではないか」と綴り、新たな事業に希望を見出しました。そして、先生の連載が100回を迎えた現在、町には新しい価値観や方法論を持った方が多数訪れ、つながりの力で協働していただけるようになってきました。この火を絶やさぬよう、皆さまには多様性を認め、育む町民であり続けていただきたいと願っています。

さまざまな困難を不撓不屈の町民力によって乗り越えていきましょう。
小布施町、頑張ってまいりましょう！

目 次

1	ロトウザクラ（平成24年４月）	P6	51	ミヤマナルコユリ・ナルコユリ（平成28年６月）	P22
2	モミジバフウ（平成24年５月）	P6	52	ニワトコ・キミノニワトコ（平成28年７月）	P23
3	スイカズラ（花）（平成24年６月）	P6	53	オモダカ・アギナシ（平成28年８月）	P23
4	ヤマゴボウ（平成24年７月）	P7	54	コクサギ（平成28年９月）	P23
5	オオマツヨイグサ（平成24年８月）	P7	55	ミゾソバ・オオミゾソバ（平成28年10月）	P24
6	ヤマハギ（平成24年９月）	P7	56	センボンヤリ（平成28年11月）	P24
7	ススキ（平成24年10 月）	P8	57	カワラケツメイ（平成28年12月）	P24
8	リュウノウギク（平成24年11月）	P8	58	ミスミソウ（平成29年１月）	P25
9	ヒイラギ（平成24年12月）	P8	59	マルバコンロンソウ（平成29年２月）	P25
10	アカマツ（平成25年１月）	P9	60	カラマツ（花）（平成29年３月）	P25
11	メタセコイヤ（平成25年２月）	P9	61	スギ（平成29年４月）	P26
12	セリ（平成25年３月）	P9	62	ウワミズザクラ（平成29年５月）	P26
13	アブラチャン（平成25年４月）	P10	63	ノイバラ（平成29年６月）	P26
14	２種のホトケノザ（平成25年５月）	P10	64	マタタビ（平成29年７月）	P27
15	イボタノキ（平成25年６月）	P10	65	タケニグサ（平成29年８月）	P27
16	ムラサキシキブ（平成25年７月）	P11	66	ヤハズソウ（平成29年９月）	P27
17	ヤブカンゾウ（平成25年８月）	P11	67	イシミカワ（平成29年10月）	P28
18	クズ（平成25年９月）	P11	68	サルトリイバラ（平成29年11月）	P28
19	オギ（平成25年10月）	P12	69	マメガキ（平成29年12月）	P28
20	カマツカ（平成25年11月）	P12	70	ヒメアオキ（平成30年１月）	P29
21	ヤブサンザシ（平成25年12月）	P12	71	オニグルミ（平成30年２月）	P29
22	スイカズラ（実）（平成26年１月）	P13	72	ヒメニラ（平成30年３月）	P29
23	アズマネザサ（平成26年２月）	P13	73	フクジュソウ（平成30年４月）	P30
24	クヌギ（平成26年３月）	P13	74	ヤマブキ（平成30年５月）	P30
25	アズマイチゲ（平成26年４月）	P14	75	ネコノメソウ（平成30年６月）	P30
26	ハシリドコロ（平成26年５月）	P14	76	ノリウツギ（平成30年７月）	P31
27	ヒメコウゾ（平成26年６月）	P14	77	ニガクサ（平成30年８月）	P31
28	シモツケ（平成26年７月）	P15	78	エゾノコリンゴ（平成30年９月）	P31
29	ヤマユリ（平成26年８月）	P15	79	イヌタデ（平成30年10月）	P32
30	クサギ（平成26年９月）	P15	80	エノキ（平成30年11月）	P32
31	コシオガマ（平成26年10月）	P16	81	ヌルデ（平成30年12月）	P32
32	クロウメモドキ（平成26年11月）	P16	82	ツルマサキ（平成31年１月）	P33
33	キヅタ（平成26年12月）	P16	83	クリ（平成31年２月）	P33
34	マルミノウルシ（平成27年１月）	P17	84	エドヒガン（平成31年３月）	P33
35	ヤマコウバシ（平成27年２月）	P17	85	ナニワズ（平成31年４月）	P34
36	フキ（平成27年３月）	P17	86	ミヤマウグイスカグラ（令和元年５月）	P34
37	キブシ（平成27年４月）	P18	87	オドリコソウ（令和元年６月）	P34
38	マムシグサ（平成27年５月）	P18	88	セキショウ（令和元年７月）	P35
39	ハンショウヅル（平成27年６月）	P18	89	イタチササゲ（令和元年８月）	P35
40	クマノミズキ（平成27年７月）	P19	90	ブタクサ・オオブタクサ（令和元年９月）	P35
41	キツネノカミソリ（平成27年８月）	P19	91	イワカラマツ（令和元年10月）	P36
42	ヤブタバコ（平成27年９月）	P19	92	ハナタデ（令和元年11月）	P36
43	ガマズミ類３種（平成27年10月）	P20	93	フユノハナワラビ（令和元年12月）	P36
44	シオデ（平成27年11月）	P20	94	ウラシマソウ（令和２年１月）	P37
45	クコ（平成27年12月）	P20	95	ザイフリボク（令和２年２月）	P37
46	ジャノヒゲ（平成28年１月）	P21	96	ツノハシバミ（令和２年３月）	P37
47	サイカチ（平成28年２月）	P21	97	七草ホトケノザ（令和２年４月）	P38
48	ペカン（平成28年３月）	P21	98	ウスバサイシン（令和２年５月）	P38
49	ダンコウバイ（平成28年４月）	P22	99	ヤマツツジ（令和２年６月）	P38
50	イカリソウ（平成28年５月）	P22	100	クサノオウ（令和２年７月）	P39

おぶせ自然暦
four seasons in obuse

植物は名前を覚えると
道を歩いているときに向こうからとびこんで来るようになるよ
名前を知らなければ宝物に気づかずに通り過ぎてしまう

案内人：清水照雄さん（栗ガ丘）

No.1 小布施に春を告げる「ロトウザクラ」

ソメイヨシノよりも一足先に咲き始めるロトウザクラ。漢字で露桃桜と書くように、原産はロシアや中国北部といわれています。ロトウザクラは桃の花です。桜の花に似ていますが、花びらは桜より小さく色も淡いピンク色をしているのが特徴。小布施では浄光寺の駐車場などでも見ることができます。冬の寒さ厳しい北信濃に春の風が吹きはじめています。





撮影日：４月10日(H24)
撮影地：おぶせ藤岡牧夫
美術館駐車場



雁田山のふもとから第一回目が始まりました。このロトウザクラは、日露戦争の凱旋記念にロシアから持ち帰ったという逸話があります。

・・・

No.2 一見すると楓のような「モミジバフウ」

漢字で紅葉葉楓と書きます。これは葉がカエデにそっくりなためで、見た目と名前からカエデの仲間と思われがちですが、カエデ科ではなくマンサク科フウ属に属します。花は上部の雄花と下部の雌花に分かれ、また乾燥した果実は特徴的な形をしています。撮影日には花と果実が同じ枝についていて不思議な感じがしました。春から紅葉する秋まで一年中見る人を楽しませています。





撮影日：５月８日(H24)
撮影地：千曲川ハイウェイ
ミュージアム



総合公園では「モミジバフウ」新生病院では「アメリカフウ」と名前の異なる看板がありますが、これらは同じものです。

・・・

No.3 2色の花が楽しめる「スイカズラ」

つる性植物のスイカズラ。花を口にくわえて蜜を吸うと、甘い味がするため「吸い葛（かずら）」と名付けられたといわれています。葛とはつる性植物の総称です。

咲き始めの花の色は白色ですが、日数が経過すると拡大写真奥のように薄黄色に変色していきます。そのため一つの枝に白色と薄黄色、２色の花が咲いたように見えます。





撮影日：６月９日(H24)
撮影地：雁田山
小布施KINGS（キングス）
（※現小布施 QUEST）



２色の花を金と銀に見立てた金銀花という別名もあります。蕾を乾燥させたものは生薬として使われます。

No.4 ゴボウと呼ばれるが食べられない「ヤマゴボウ」

茎や葉はゴボウと似ていませんが、その根の形が似ていることから名付けられました。一般的に山ゴボウと称される植物には３種類あります。一つ目はこのヤマゴボウ。二つ目はソバのつなぎにも使用されるオヤマボクチ。三つ目は漬物などにされるモリアザミ。ヤマゴボウはヤマゴボウ科に分類されますが食用ではなく、食用とされるオオヤマボクチやモリアザミはキク科に分類されます。





撮影日：７月７日(H24)
撮影地：雁田山
ゆうすげ花壇奥



ヤマゴボウは根に硝酸（しょうさん）カリウムを含み有毒ですが、漢方薬の材料にもなります。毒と薬は表裏一体ですね。

・・・

No.5 林柳波が詠んだ「オオマツヨイグサ」

オオマツヨイグサはツキミソウと同じアカバナ科マツヨイグサ属に属し、日が沈むと花が咲き、午前中にはしぼんでしまうため「月見草」と呼ばれます。現在は「月見草」と呼ばれる花のほとんどはメマツヨイグサで、オオマツヨイグサはほとんど見られません。以前は千曲川の土手に群生しており、林柳波が小布施の景色を詠んだ詩「月見草」はオオマツヨイグサを詠んだものと考えられます。





撮影日：８月１日(H24)
撮影地：須坂市国道406号線
峰の原高原



千曲河原の砂地に咲いて　月にはにかむ月見草　何が笑止くてうつむきなさる
誰もいやせぬ　川瀬の波と　あとは千鳥が鳴くばかり（林柳波「月見草」）

・・・

No.6 可憐な花を咲かせる秋の七草「ヤマハギ」

秋の七草といえば真っ先に数えられるのが「ハギ」。秋の訪れを告げる花です。細いツルのような枝に丸い葉と紅紫色の花を無数につけます。ヤマハギはマメ科、落葉小低木の植物で日本各地で見ることができます。古くから日本人に親しまれ、万葉集で最もよく詠まれます。また、秋の彼岸に食べる「ぼたもち」はハギが咲くころに作るので「おはぎ」と呼ばれています。





撮影日：９月６日(H24)
撮影地：雁田山



秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七草の花　萩の花 尾花 葛花 瞿麦（なでしこ）の花
姫部志（をみなえし） また藤袴（ふじばかま） 朝貌（あさがお）の花（山上憶良（やまのうえのおくら）　万葉集巻八1537 - 1538）

No.7 秋の夕暮れを美しく彩る「ススキ」

ススキは先月の「ハギ」と共に秋の七草の一つです。別名はかやぶき屋根に使われることから「カヤ」、または枝垂(しだ)れた形が尾に似ているところから「尾花」といいます。拡大写真でぶら下がっている袋状の部分が雄しべの葯(やく)で花粉が入っています。短い毛でおおわれているブラシ状の部分（上向きになっている）が雌しべです。受粉し種子をつくるとタンポポのように風に乗り種子を遠くまで飛ばします。





撮影日：10月3日(H24)
撮影地：雁田山



No.19のオギと異なり、株立ちし、茎の下の方から葉をたくさん出しています。

No.8 秋の名残を惜しむか「リュウノウギク」

10月の中旬頃に咲き始める白色の優しい花が、雁田山で1年の最後に咲くリュウノウギクです。茎や葉を少しちぎると特有な香気を発しますが、その香りが竜脳香（リュウノウコウ）に似ていることから名付けられました。霜が降りるようになると、花びらが少し赤みがかかることもあります。山麓や登山道で見ることができる、貴重な花の一つです。





撮影日：11月5日(H24)
撮影地：雁田山
　　ホタル池付近



竜脳香は樟脳、すなわちタンスの防虫剤のような香りです。

No.9 人々を見守り700年、雁田の「ヒイラギ」

雁田の呉羽敏正さんのヒイラギは樹齢700年と推定され「雁田のヒイラギ」として知られています。昭和47年に町、平成23年に長野県の天然記念物に指定され大切に保護されてきました。一般的にヒイラギの葉はトゲのある特徴的な形で有名ですが、成長すると丸みを帯びてきます。このヒイラギは古い株のため滑らかな楕円形となっています。キンモクセイと同じモクセイ科で、花の季節には心地よい香りを漂わせます。





撮影日：12月5日(H24)
撮影地：雁田浄光寺付近



ヒイラギは邪気を払うとされ、ナンテンとともに鬼門に植えるとよいとされます。
クリスマスリースに使うものはセイヨウヒイラギで別物です。

No.10 門松となって正月を彩る「アカマツ」

お正月飾りによく使われる「アカマツ」は、本州を中心に広く分布しています。植物はほとんどが1年で種子を実らせますが、アカマツなどのマツ科は2年を要します。春に咲く雌花（写真1）は受粉し、その年の冬には1.5㌢ぐらいに成長します（写真2）。翌年の春には種子の脇から新芽（写真3）が生え、秋頃には成熟します（写真4）。そのためお正月飾りには、大きさの異なる種子（写真2、4）が付いていることがあります。









撮影日：1月4日(H25)
（写真2、4）



写真で時系列を見ると、1が春、3が翌年の春で、2が翌年の夏、4が翌年の暮れです。

No.11 化石植物「メタセコイヤ」

メタセコイヤは当初、化石が先に確認され実物は未発見だったために、絶滅種と考えられていました。しかし後に、中国に野生していることが発見され「生きている化石」とも呼ばれます。

雄花（写真）は10月には膨らみ、2月から3月にかけて花粉を飛ばします。町内では各所に植えられていて、町営グラウンド、森の駐車場、小布施総合公園などでも見ることができます。





撮影日：2月7日(H25)
撮影地：北斎館



秋の紅葉が美しく、並木として人気があります。

No.12 互いに競り合い新芽を伸ばす「セリ」

セリ、ナズナ、ゴギョウ（オギョウ）、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ。セリは春の七草のひとつで、香りと歯ごたえの良さが特徴的です。日本各地の水田や湿地、溝の中などに群生。秋に根元から細長いほふく枝（匍匐枝）を伸ばし、その先に新芽をつけて春を待ちます。お互いが競い合うように新芽を伸ばす様子から、セリ（競り）と呼ばれるようになったと言われています。





撮影日：3月8日(H25)
撮影地：雁田ゆうすげ花壇



春の七草は人日の節句（1月7日）に七草粥を食べると病気をしないとされたものです。旧暦の節句のため、現在の2月くらいで春には少し早いですね。

No.13 面白い名前の春の花　「アブラチャン」

早春、山に行くと薄黄緑色の小さな花を無数につけた木に出会います。この木はクスノキ科のアブラチャン（油瀝青）。実や樹皮に油分があり、その香りがアスファルト（瀝青）に似ていることから名づけられました。アブラチャンは雌雄異株の植物で、写真は雄花です。傾斜地や日当たりが悪い場所など、生育条件の厳しい沢筋で多く目にすることがあります。





撮影日：4月4日（H25）
撮影地：ユウスゲ花壇脇山道



No.49のダンコウバイとよく似ていますが、花と枝の間の花柄（かへい）の有無で見分けがつきます。アブラチャンは有柄、ダンコウバイは無柄です。

No.14 ２種類の「ホトケノザ」

春の七草の一つ「ホトケノザ」の正式名称は「コオニタビラコ」と言い、水田で見られるキク科の植物です。葉や花の茎が地面に沿って広がる様子が仏様の蓮華座に似ていることから名づけられました。また、同じ「ホトケノザ」という名称で別の植物もあります。こちらはシソ科で花の色が赤紫色で、食べることができません。









1_ コオニタビラコの花は黄色 2_ 形が蓮華座 3_ ホトケノザは食べられない
撮影日：5月2日（H25）
撮影地：岩松院北



No.97のコオニタビラコは延徳田圃で撮影したもの。このホトケノザは岩松院北で撮影したものです。

No.15 初夏の清純な花「イボタノキ」

全国の山地や原野に自生するモクセイ科の半落葉樹「イボタノキ」。この木に寄生するイボタロウガの幼虫が、家具などの艶出しに使われていた「いぼたろう」を分泌することから名づけられました。初夏にはライラックのような甘い香りの白花を総状（穂のような形）に咲かせます。松川の堤防沿いやＪＡ須高小布施第一フルーツセンターの近くなどでも見ることができます。





撮影日：6月3日（H25）
撮影地：ゆうすげ花壇前駐車場



いぼたろう（イボタ蝋）をイボ取りに使ったことから「イボ取り木＝イボタノキ」となったとする説があります。

No.16 薄紫色の平安美人「ムラサキシキブ」

ムラサキシキブは全国の山地で見られるクマツヅラ科低木性の植物です。秋に実る紫色の実がとても美しくその姿を平安美人の紫式部にたとえて、名づけられたと考えられています。６月から７月にかけて薄紫色の小花を密集して咲かせますが、このような花のつけ方を集散花序と呼びます。雁田山でよく見ることができますが、なぜか花をつける株は少なく意外に知られていない植物の一つです。





撮影日：7月4日（H25）
撮影地：ゆうすげ花壇
岩松院側道奥



ムラサキシキブは自生種ですが、実が付きやすく庭木に向いている園芸用のコムラサキという品種もあります。

No.17 憂いを忘れさせる「ヤブカンゾウ」

盛夏になるとやぶの中に咲く橙色の花がユリ科の「ヤブカンゾウ」です。ユリ科の花びらの数は６枚が基本ですが、ヤブカンゾウは雄しべが花びらに変化したため、たくさんの花びらを持っています。中国には「この花を見て憂いを忘れる」という故事があり、「憂」の文字に「萱」を当てて書いていたので「萱草」、さらにやぶの中で見られるので「ヤブカンゾウ」と名付けられました。





撮影日：8月1日（H25）
撮影地：雁田山
せせらぎ緑道



八重のヤブカンゾウと一重のノカンゾウは若葉や蕾が食用となりますが、これらによく似ているNo.41 キツネノカミソリは有毒植物です。

No.18 国栖の人たちが作ったデンプン「クズ」

秋の七草の一つ「クズ」はツル性の植物です。昔、大和国の「国栖」という集落の人たちがツル性の植物根からデンプンを作っていました。そのデンプンは国栖の人々が作っていたことから「クズ粉」と呼ばれるようになり、クズ粉がとれるこの植物を「クズ」と名付けたと言われています。周りの植物に覆いかぶさるように成長し、伐採された山裾や人里で見ることができます。花は鮮やかな紫色でフジの花とよく似ています。





撮影日：９月２日（H25）
撮影地：雁田山せせらぎ緑道



国栖は奈良県の吉野地域にあり、現在でも吉野葛の産地として有名です。

No.19 ススキと見まごう「オギ」の花

秋になると「ススキ」や「オギ」が穂を出し秋の深まりをいっそう感じさせてくれます。「オギ」はススキと同じイネ科で河原や水辺の近くに群生しているところを見かけます。よくススキと間違えられますが、オギは草丈が２m以上の大型で葉の幅も広くて長いことが特徴です。花の咲く時期に根元の葉が枯れ落ちるので見分けがつきます。晩秋になると白い大きな花穂に西日が当たり銀色に輝く光景は見事です。





撮影日：10月3日 (H25)
撮影地：下松川橋河川敷入口

松川の堤防や川原で見ることができます。一本立ちしていて、花のころになると、茎の下部の葉が枯れ、茎が長く見えています。

No.20 「カマツカ」またの呼び名を「ウシコロシ」

カマツカはバラ科の木本性植物で、６月ごろナシの花に似た白花をつけ、11月頃には赤くてきれいな実を実らせます。幹や枝がとても固く丈夫なので、昔は草刈鎌の柄として使われていたことから、カマツカと呼ばれるようになりました。また、枝を牛の鼻輪にしていたことや鼻に穴をあけるときに使っていたことから「ウシコロシ」という別名もあります。町内では１株の自生が確認された貴重な植物です。







左＿熟した赤い実は野鳥の餌に
右＿ナシの花に似た白い小さな花を無数に咲かせる

撮影日：11月4日 (H25)
撮影地：雁田山せせらぎ緑道

残念ながら今ではこの場所で見ることはできません。

No.21 真っ赤な実が美しい「ヤブサンザシ」

「ヤブサンザシ」はユキノシタ科の低木でスグリの仲間です。11月頃に鮮やかな赤い実を無数に実らせます。６月ごろに黄緑色の可愛らしい花を咲かせますが、色が葉の色と似ているため気づく人はほとんどいません。赤い実が「サンザシ」とよく似ていることと、林などのやぶの中で見られるので「ヤブサンザシ」と呼ばれています。ちなみに「サンザシ」はバラ科で「ヤブサンザシ」とは全く異なる植物です。







左＿熟した赤い実。おいしそうに見えるが食べられない
右＿星形に見える黄緑色の花を咲かせる

撮影日：11月28日 (H25)
撮影地：大島共撰所そば雑木林

現在、大島の撮影地では見られませんが、雁田山では２カ所で確認したことがあります。

No.22 冬を忍ぶ「スイカズラ」の黒い実

スイカズラは常緑つる性植物です。初夏に甘い香りのする花を咲かせ、11月頃に真っ黒に熟した艶のある実を実らせます。花の形が蜜を吸う時の口の形と似ていることと、つる性植物を「カズラ」と言うことからスイカズラと名付けられました。また、冬の寒さに耐えて春まで実や葉が残っているので「忍冬」とも呼ばれます。花や葉、茎が漢方薬として使われ、抗炎症や抗菌作用などさまざまな効能があります。





撮影日：12月26日 (H25)
撮影地：雁田山せせらぎ緑道

No.3ではスイカズラの花、No.22はスイカズラの実を扱っています。

No.23 小さくても繁殖力が強い「アズマネザサ」

「アズマネザサ」はイネ科の多年草で、山野に群生しています。竹の仲間の中で最も小型で節からたくさんの小枝が出ているため葉が密集しています。東日本から東北地方でよく見られ、木の根元近くに生えているので「東根笹」と名付けられました。花は数十年に一度咲くと言われ、めったに見ることはできません。咲いた後はイネのような小さな実をつけて枯れてしまいます。





撮影日：2月1日 (H26)
撮影地：小布施総合公園周辺

住宅地や農地周辺で見かけますが、タケノコは細くて、食用には使われません。

No.24 大きなどんぐりを実らせる「クヌギ」

「クヌギ」はブナ科の落葉高木です。春に咲く雄花は栗に似ています。雌花は葉の付け根に咲きますが、小さくて目につきません。呼び名は「国木」がなまり「クヌギ」になったと言われています。

春に受粉した雌花は、秋に写真１の中央にあるような丸い形の小さな実になり翌春を迎えます。小さな実は、受粉から約１年半の月日をかけ、２年目の秋に写真２のような直径2cmぐらいの大型のどんぐりを実らせます。







撮影日：３月３日 (H26)
撮影地：小布施総合公園

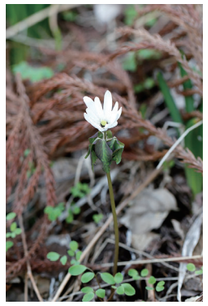
１の出っ張りが２のどんぐりの大きさまでふくらみます。

No.25 静かに春の訪れを告げる「アズマイチゲ」

キンポウゲ科の「アズマイチゲ」は、春のごくわずかな期間しか花を咲かせないためフクジュソウやニリンソウと並んで「スプリングエフェメラル（春の妖精）」と呼ばれています。一株に一輪の花を咲かせることからイチゲの名がつけられました。この花には花びらはなく白く見えるのはがく片です。

高さは15cm程度まで成長し、北海道から九州まで山地や山麓の日当たりの良い場所に生育しています。





撮影日：4月2日（H26）
撮影地：ゆうすげ花壇付近

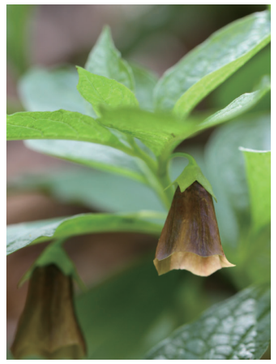


スプリングエフェメラルは春先に花を咲かせ、夏までに地下に栄養を蓄え、その後春まで地下茎で過ごします。カタクリなどもこの仲間です。

No.26 猛毒なので採らないように「ハシリドコロ」

「ハシリドコロ」はナス科の植物で、茎は直立し、柔らかい葉の脇から紫がかった茶色の花を一個下向きにつけます。春先の新芽がフキノトウに似ているため食べてしまう人がいますが、植物全体にアルカロイド成分を含む有毒植物です。

誤って食べると中毒をおこし、苦しさのあまり走り回ってしまうこと、また地下茎がオニドコロに似ていることから「ハシリドコロ」と名付けられました。





撮影日：5月1日（H26）
撮影地：雁田山



ハシリドコロ



フキノトウ



芽吹きの初期の段階がフキノトウと区別できない程似ています。上の追加した写真の左がハシリドコロ、右がフキノトウで、そっくりなのが分かると思います。

No.27 和紙の材料「ヒメコウゾ」

「ヒメコウゾ」は雁田山のような人里近くの山地に自生しているクワ科の低木です。雌雄同株の植物なので雄花と雌花は一本の木に咲き、どちらも花がたくさん集まった球形をしています。雄花はおしべが４本、雌花は子房の先に赤い糸状の花柱があり、受粉した雌花は６月下旬ごろ球形の赤い実に熟します。

木の皮から作られる和紙は品質が高く、このあたりでは「内山紙」の名前で知られています。





1_ 樹皮の繊維は強くて長い 2_ 雄花（左）と雌花（右）

撮影日：5月28日（H26）
撮影地：雁田山



クワの実に似た赤い実は甘味があり食べることができますが、実の中のつぶつぶが口の中に残るのが難点です。なお、コウゾはヒメコウゾとカジノキの雑種です。

No.28 梅雨に咲く赤い花「シモツケ」

「シモツケ」はバラ科の低木で、樹高は30 ～ 50㎝程度。６月の中旬頃から細い茎の先に、赤色の小さな花がたくさん集まって咲きます。このような花の咲き方を散房花序（さんぼうかじょ）と呼びます。一個の花には、５枚の花びらがあり、その中に多数の雄しべと５本の雌しべがあります。古くから観賞用として庭に植えられ、名前は下野国（しもつけのくに）（栃木県）で最初に発見されたことから名付けられました。





撮影日：6月30日（H26）
撮影地：雁田山



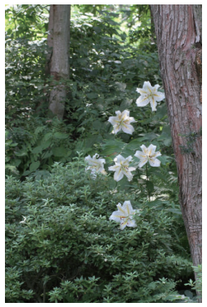
樹高が低いので垣根にしたり、高木の周りに植えられます。

No.29 優美で巨大な王様「ヤマユリ」

ヤマユリはユリ科で最大の花を咲かせる日本特産の植物です。開花期には、辺り一面に香りを漂わせます。その風格は１メートルほどの草丈に白い大輪の花を数輪咲かせるため重みで傾くほどです。

岩松院には自生するヤマユリがあり、雁田山の原風景を残しています。この花は長野県から準絶滅危惧種に指定されています。もし出会うことがあったら、自然のままの姿を見守っていきましょう。





撮影日：7月23日（H26）
撮影地：岩松院



発芽から開花まで５年以上かかる貴重な花です。山で見かけてもとるのは写真だけにしましょう。

No.30 大きな五角形が特徴的な「クサギ」

クサギの葉は、名前のとおり特有な臭気がありますが、ゴマのような香りと表現する人もいて、人により感想が分かれます。長い葉柄と幅広く先の尖った葉の形が特徴の低木で、ムラサキシキブと同じクマツヅラ科です。花は８月から９月にかけて咲き、白色でほのかな香りがあります。４本のおしべと１本のめしべが長く花びらの外に突き出しています。花びらは白い筒状で、がくは赤色です。いずれも先端が５つに深く切れています。





撮影日：9月1日（H26）
撮影地：雁田山



葉の匂いはカメムシ臭ですが、若葉は食用になり、実は草木染の原料となります。

No.31 謎に満ちた半寄生植物「コシオガマ」

「コシオガマ」は日当たりの良い草原などに生えている一年生の半寄生植物です。自分で光合成を行いながら、他の植物にも寄生し、そこから養分を摂って生活しています。どんな植物に寄生するのか観察していますが、明確にはなっていません。花は唇を突き出したような筒型で、上唇は２つに、下唇が３つに裂けています。一年生植物なので、種子ができないと絶滅してしまいます。現在２か所で生育を確認しています。





撮影日：10月1日（H26）
撮影地：雁田山



シオガマギクに似た小さい花のためコシオガマ。シオガマは、浜で塩を作る竈で世阿弥の謡曲から「浜で美しいのは塩竈」＝「葉まで美しいのは塩竈」から来たもの。

No.32 黒色が美しい「クロウメモドキ」の実

クロウメモドキは、山地や湿地で見かける植物です。雌雄異株の低木で高さは普通２～３㍍、葉の長さは２～４㌢くらいです。６月頃、葉の根元に小さな人目につかない花が、雌雄別々の木に咲きます（写真２、３）。雄花雌花ともにガクも花びらも４枚ありますが、花びらは小さくて写真でも確認できません。秋には黒色で艶のある実が熟します（写真１）。美しい実ですが食用にはなりません。雁田山では２か所で確認されています。







1_クロウメモドキの実
2_雄花 3_雌花
撮影日：10月29日（H26）
撮影地：雁田山



黒い実がモチノキ科のウメモドキに似ているからクロウメモドキ。クロウメモドキ自身はモチノキ科ではなくクロウメモドキ科です。

No.33 常に緑色の葉をつける「キヅタ」

常緑の植物なので紅葉はせず、冬でも葉が緑色なため「フユヅタ」という別名で呼ばれることもあります。

晩秋の頃、花を咲かせますが、その形は小さな花がたくさん集まったようです。実は球状で、翌年の春にかけて熟し、黒紫色に変化します。山野で普通に見られるつる性の植物ですが、コシアブラやウド、タラの木などの木本性の植物と同じ、ウコギ科の仲間です。





上_キヅタの実
左_花
撮影日：10月29日（H26）
撮影地：雁田山



キヅタはウコギ科。ツタはブドウ科です。アメリカの名門私立大学群「アイビーリーグ」のアイビーはこのキヅタの方です。

No.34 人知れず咲く早春の花「マルミノウルシ」

雁田山麓に３月上旬頃、赤みがかった長楕円形の葉が束のように生えているのがマルミノウルシの芽生えです。成長するに伴い赤みが取れ、高さ40～50㎝ほどに成長すると花を咲かせます。一見すると葉のような花ですが、雄しべと雌しべはしっかりとあります。しかし、花びらはありません。

県内ではまれにしか見ることができず、絶滅危惧種レベルIAに指定されている大変貴重な植物です。





上_芽生えの様子
左_中心の先端が３つに分かれているのが雌しべ、雄しべは周辺の黄色い部分
撮影地：雁田山



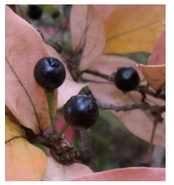
ノウルシは実の表面に小さいイボ状の突起がたくさんありますが、マルミノウルシにはこの突起がありません。

No.35 かれんな花「ヤマコウバシ」

クスノキ科特有の香りを発するため、山で香ばしい香りがするところから「ヤマコウバシ」と名付けられました。４月の中旬頃になると人目につかずひっそりと、かれんな花を咲かせます。

雌花はめしべが大きく花の外に飛び出しています。雌雄異株で、雁田山に生えている雌株は実をつけるので、雄株もどこかにあるはずですが、まだ見つけることができていません。





上_実は熟すと緑色から黒色に変色する
左_雌花
撮影地：雁田山



黒い実には辛みがあるため、別名「ヤマコショウ」とも呼ばれます。

No.36 近くで見ると違う「フキ」の花

早春の味覚フキノトウ。花芽の開花後に茎が塔のように伸びることから、フキノトウと呼ばれるようになりました。雌雄異株で茎が長く伸びるのは雌株です。雄花は花粉を散らすと、茶色くなって枯れてしまいます。一方、雌花には毛があり、成熟すると同じキク科のタンポポのように綿毛となって風に乗って種子を飛ばします。











1_開花後の雄株 2_雄花 3_花粉のついた雄しべ 4、5_雌花には毛があり成熟すると綿毛に

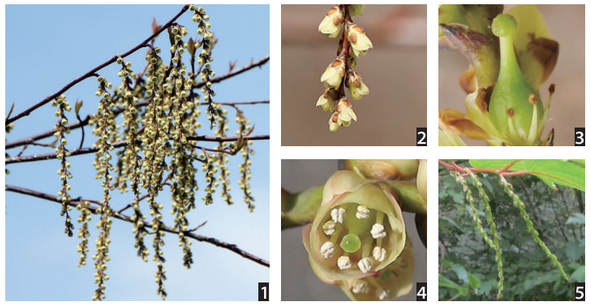


フキには雄株と雌株があり、花は葉が出る前に咲きます。雄株には雄花、雌株には雌花が咲きます。

No.37 早春に咲く黄色い花「キブシ」

キブシはキブシ科の落葉低木で、早春まだ周りの樹木が葉を出す前に、穂状の黄色い花をぶら下げます。

雌雄異株の植物で、雌花はめしべが発達し、おしべが小さく退化していますが、雄花はおしべもめしべもはっきりしています。雄花の中にあるめしべはどんな働きをしているのか興味がもたれます。



1_ キブシの花 2_ 雌花 3_ 雌花の中の雌しべと雄しべ 4_ 雄花
5_ 開花を待つ蕾（H26秋撮影）　撮影日：4月9日（H27）　撮影地：雁田山



キブシ（木五倍子）の果実は、フシ（五倍子＝No.81 ヌルデのコブで染料に使う）の代わりに染料に用いたため、木のフシ＝キブシとなりました。

No.38 マムシを連想させる「マムシグサ」

夏頃、写真のような特異な形をした花を見ることがあります。これがサトイモ科のマムシグサです。

花びらのように見えるのは仏焔包（ぶつえんほう）です。花は仏焔包の筒の中の棒状になった所にあり、雄花は、棒状の上の部分に付き、雌花は根元に集まっています。

近年の研究によると、塊茎（かいけい）（地中の芋）が小さな時は雄花が咲き、育ってくると雌株となって雌花が咲く雌雄異株の花と報告されています。



1_ マムシグサ 2_ マムシの様な茎模様 3_ 雌花
撮影日：5月4日（H27）
撮影地：雁田山



No.94 ウラシマソウによく似ますが、ウラシマソウの特徴の釣り糸のような紐状突起は見られません。

No.39 花の形から名前がついた「ハンショウヅル」

ハンショウヅルは5月中旬から6月初旬に雁田山で花を見ることができます。花が半鐘のような形をしているため名付けられました。半鐘の形をしている部分は「ガク」にあたり、「花びら」ではありません。花びらは退化してしまいました。雁田山には、紅紫色と白色の2種類のハンショウヅルがあります。紅紫色の花はよく見かけることができますが、白色の花はトリガタハンショウヅルで、めったに見ることのできない貴重種です。



1_ ハンショウヅル 2_ トリガタハンショウヅル 3_ ハンショウヅルの花の中の雄しべ
撮影日：5月29日（H27）
撮影地：雁田山



白い花で雄しべに毛があるものがトリガタハンショウヅル、毛が無かったらシロバナハンショウヅルです。

No.40 対生（たいせい）の葉を持つ「クマノミズキ」

6月中旬を過ぎる頃から、雁田山で大木の枝先に小さな白い花が集まって咲いているのを見ることができます。散房花序（さんぼうかじょ）という咲き方です。葉のつき方は対生といい、2枚ずつ対になっています。この木はミズキ科のクマノミズキです。この仲間に「ミズキ」がありますが、ミズキは葉が1枚ずつ交互に出ており、葉の出方が分類のポイントです。ミズキの名前は、この木が水分をたくさん含み、春先に枝先を切ると水が滴ることから付けられました。



1_ クマノミズキ
2_ クマノミズキの花
3_ 対になっている葉
撮影日：6月29日（H27）
撮影地：雁田山



葉が互生のミズキと葉が対生のミズキを区別するためにクマノ（三重県熊野）の名前をつけました。

No.41 花見ず・葉見ずの「キツネノカミソリ」

7月下旬、雁田山で赤黄色の花を見ることができます。これが「キツネノカミソリ」で、ヒガンバナ科の多年生植物です。3月下旬ごろ葉が出てきますが、6月下旬ごろには枯れます。葉がなくなってから花が咲きます。名前は、葉がカミソリの刃に似ているところから付けられました。キツネについては、ほかの説明をする人もありますが、狐が出そうな所にあるからとするのが良いように思います。有毒植物ですから誤って食べないよう注意してください。



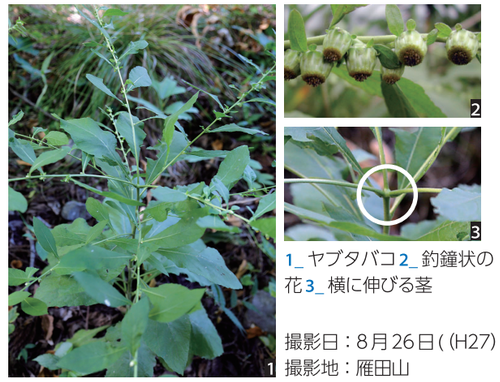
1_ キツネノカミソリの花 2_ カミソリの刃に似ている葉（4月撮影）
撮影日：8月4日（H27）
撮影地：雁田山



キツネノカミソリは花見ず・葉見ず。この特徴はヒガンバナ（曼殊沙華）でも見られますが、ヒガンバナは花が咲き終わってから葉が出る、葉見ず・花見ずです。

No.42 形状が変だよ「ヤブタバコ」

秋の風がそよぐ頃、雁田山でヤブタバコの花を見ることができます。草丈は50cmくらいで、横に張り出した枝に小さな釣鐘状の花がたくさん下がっています。成長が進むと、茎の先は切り取られたかのように、上への成長が止まり、枝を横に張り出します。こうしてヤブタバコ特有の形状が出来上がります。この性質を知らないと、誰かが茎の先を切ったと思ってしまいます。ぜひ確かめてみてください。9月中であれば観察可能です。



1_ ヤブタバコ 2_ 釣鐘状の花 3_ 横に伸びる茎
撮影日：8月26日（(H27）
撮影地：雁田山



葉がタバコの葉に似てやぶに生えるからヤブタバコです。タバコにはなりませんが、薬用に使われます。

No.43 秋に真っ赤な実を光らせる「ガマズミ」

秋の雁田山に赤い実が光っています。これはガマズミの実です。「ヨツズミ」とも呼ばれるこの実の甘酸っぱさを味わった人も多いことでしょう。雁田山にはガマズミ、ミヤマガマズミ、コバノガマズミの３種類が生えています。これらは葉の表面や大きさが違います。葉の表面に毛が多いガマズミ。葉の表面が光っているミヤマガマズミ。２種より葉が小さいのがコバノガマズミです。雁田山は３種類を見ることができる貴重な環境です。





1_ 実も光沢があるミヤマガマズミ 2_ コバノガマズミの葉は指先ほどの長さ 3_ 細かな毛が葉の表面を覆うガマズミ

撮影日：9月30日 (H27)
撮影地：雁田山



青森県三戸町ではこのガマズミの汁をジョミという名のジュースで売り出しているようです。

No.44 黒光りする「シオデ」の実

シオデはつる性の植物で、葉の基の托葉（たくよう）が変形して巻きひげになり、周りの植物に巻きついて、つるが伸びていきます。雌雄異株の植物で、雄株と雌株があり、夏に雄花・雌花が咲きます。雄花には雄しべが６本あります。雌花には短い３本の花柱（雌しべ）があります。秋に雌株に真っ黒い実がかたまってつきます。雌花が咲く形状をみれば、秋の実の様子が納得いくと思います。






1_ つるを伸ばして木に巻きつくシオデ 2_ シオデの実 3_ 雌花 4_ 雄花（3、４は夏に野沢温泉で撮影）

撮影日：10月29日 (H27)
撮影地：雁田山



新芽は山のアスパラとも呼ばれ食べられます。

No.45 冬に光る「クコ」の赤い実

晩秋から初冬の松川の堤防で、艶のある赤い実を見かけます。これがクコの実です。クコはナス科の低木植物で川の土手などで見ることができます。８月から９月に紫色の花を咲かせ、秋にはたくさんの赤い実が下がります。クコは「枸杞」と書き、カラタチのようなとげがあり、ヤナギのようにしなやかな枝をしているという意味ですが、これを音読みにしてクコと読みます。





1、2_ 実は１㎝程の大きさで楕円形 3_ 紫色の花びらに濃い紫色の筋が入っているクコの花（撮影地：小布施町大島）

撮影日：12月3日 (H27)
撮影地：松川堤防

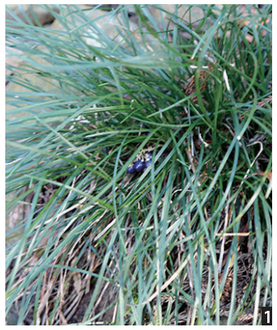


昭和30年代には、薬用として採取されることが多くありました。

No.46 真冬に青色の玉が光る野草「ジャノヒゲ」

雁田山の山麓で、葉が細長く、濃い緑色をした植物を見かけます。ユリ科の「ジャノヒゲ」、別名「リュウノヒゲ」です。７月下旬ごろ花が咲いた後、緑の玉ができ、晩秋になると青く色づきます。この玉は翌年の春まで残ります。

玉は、種子であって実ではありません。花が受粉して成長が始まると、果実になる果皮が破れ、果肉ができず、種子だけが成長して青色の美しい球になります。





1_ 細長い葉を多数出しているジャノヒゲ 2_ 葉をかき分けるとつやのある青い種子が顔をのぞかせる 3_ 淡い紫色の花

撮影日：12月28日 (H27)
撮影地：雁田山登山道



長い葉が地面を覆うため緑化植物として使われます。また、耐水性が高いため、水槽の水回りの植物としても利用されます。根は漢方の薬になります。

No.47 とげで身を守る「サイカチ」の木

サイカチはマメ科の高木植物で、ニセアカシヤの仲間です。幹に細いとげがあります。とげは枝が変形し、草食動物の被害に遭わないよう進化しました。

私たちの周りにはとげのある植物がたくさんありますが、カラタチ、グミ、サンザシなどは枝が変化し、バラやタラノキは表皮（幹の皮）、サボテンは葉が変形したものです。雁田山ではサイカチを２カ所で３本確認しています。平成24年に長野県はサイカチを絶滅危惧種に指定しました。





1、2_ つまようじより少し太く鋭いとげが多数 3_ ６月頃には黄色い花が咲く

撮影日：2月1日 (H28)
撮影地：雁田山登山道



若葉は食用、マメは薬用、サヤは石鹸の代わりとして使われました。

No.48 髙井鴻山記念館の珍品古木「ペカン」

髙井鴻山記念館の庭に一本の古木があります。この木はクルミ科の高木「ペカン」といって、昭和２５年頃植えられました。枝が張らないように整枝されているため、花を見ることはできませんが、春になるとクルミの木の葉に似た葉が出ます。ペカンはアメリカ大陸原産で食用に栽培されています。鴻山館のペカンの幹は周囲約210ｃｍありますが、害虫で傷められていて、保護が求められます。大島にもペカンを育てていた家があったそうです。






1_ 樹高30ｍになる高木 2_ ペカンの梢 3_ クルミの花に似た雄花 4_ ピーカンナッツと呼ばれる実（2、3、4は清水さん提供写真）

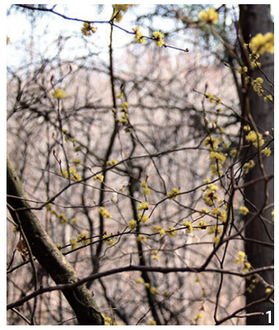
撮影日：3月3日 (H28)
撮影地：髙井鴻山記念館



髙井家17代当主髙井彰氏が昭和25年ごろ屋敷内に植えました。ペカンの実はピーカンナッツとして販売されることがあります。脂肪分が多いおいしい実です。

No.49 早春の山に咲く黄色い花「ダンコウバイ」

木々が芽吹く前の雁田山で黄色い花をつけた低木を見かけます。クスノキ科のダンコウバイです。ダンコウバイは雌雄異株の植物です。雄花には花びらに相当する花被片６枚と雄しべが９個あります。雌花には花被片６枚と長く突き出した雌しべ１本、仮雄しべが９個あります。蕾は総苞に包まれ、数個の花が一所に集まって咲きます。受粉すると小さい楕円形の緑色の実をつけ、秋になると赤から黒色になって熟します。





1_ 早春、たくさんの黄色い花を咲かせるダンコウバイ 2_ 雄花 3_ 突き出た雌しべが特徴の雌花

撮影日：3月30日 (H28)
撮影地：雁田山登山道



ダンコウバイ（檀香梅）の檀香とはビャクダン（白檀）から来ており、甘い香りの花をつけます。

No.50 不思議な形の「イカリソウ」

春の雁田山で下向きに咲く淡い紫色の花を見かけます。メギ科のイカリソウです。花の姿が船のいかりのような形をしているので「イカリソウ」と名前が付けられました。この花を下から見ると、尾のように長く突き出している部分があります。これは花びらの後ろの部分が伸びたもので、距と言います。

花びらが４枚組み合わさっていて、距が４本突き出し、全体がいかりのような形になっています。






1、2_ 草丈は30㎝ほど、細い茎に花が咲く 3_ 下から見たイカリソウ 4_1枚の花びら（2、3、4は清水さん提供写真）

撮影日：4月27日 (H28)
撮影地：雁田山



イカリソウエキスは強壮剤にも使われます。

No.51 雁田山に咲く２つの鳴子百合 ～「ミヤマナルコユリ」と「ナルコユリ」～

初夏、「ミヤマナルコユリ」の花が咲き、追うように「ナルコユリ」が咲きます。どちらもユリ科の多年生植物です。かつて日本の農業では、缶などの鳴り物「鳴子」をつけた長い網を水田に張り、鳥を追い払っていた歴史があり、その鳴子のような白い花が咲く姿から名付けられました。ミヤマナルコユリは、花柄が葉の付け根から葉の中心まで伸び、そこから花を下げます。「ナルコユリ」は長い茎に沿ってたくさんの花が咲きます。





1、2_ 草丈約30㎝のミヤマナルコユリ。葉の中心まで茎が伸びる 3_ ナルコユリは草丈50㎝ほど

撮影日：5月20日、6月4日 (H28)
撮影地：雁田山



上から見ると葉だけ見えて花が咲いているか分からないですが、葉をあげるとたくさん白い花が咲いています。

No.52 「ニワトコ」と「キミノニワトコ」

６月下旬から７月上旬、松川の下流では赤い実が集まって輝く低木に出合います。ニワトコの木です。赤い実は柔らかく、大きさは３～５mm。小さな種子が３、４個入っています。千曲川河川敷には、黄色い実をつけたニワトコもあります。これがキミノニワトコです。このニワトコは、なかなか見ることができない種で、現在３株を確認するのみです。千曲川の河川敷は、赤色と黄色、２種類のニワトコを見ることができる貴重な場所です。





1_ 赤い実をつけるニワトコ。松川の流れに沿って多く生えている 2_ キミノニワトコ 3_ ニワトコの花

撮影日：6月28日 (H28)
撮影地：千曲川河川敷



赤のニワトコは雁田山にまだありますが、キミノニワトコは令和元年度東日本台風（台風19号）の水害によりなくなりました。

No.53 夏の水田の白い花「オモダカ」と「アギナシ」

夏の緑美しい水田に、白い花を咲かせ、葉の形は三個のくさびを組み合わせたような形をしています。葉の幅が広いほうが「オモダカ」で、狭いほうが「アギナシ」です。オモダカは、葉の形を人の顔に見立て、顔が長い茎の先に広がっているので面高と名前がつけられました。アギナシは、下方に広がる葉を人の顎に見立てています。最初に出る若い葉は割れず、顎の形にならないので、顎無しからアギナシになりました。





1_ オモダカやアギナシは田んぼの中、あぜで白い花を咲かせる 2_ オモダカの雄花 3_ オモダカの葉（左下はアギナシ）

撮影日：7月28日 (H28)
撮影地：延徳田んぼ



オモダカとアギナシは花は似ていますが、葉の違いをよく見てください。アギナシの葉はとても細いのが特徴です。

No.54 つやのある葉の下に実をつける「コクサギ」

夏、ミカン科のコクサギが実を枝に付けます。実は葉に隠れていますが、近づくとかすかに香りがします。新緑の頃は強い柑橘系の香りがします。今の時期、４個の実が一塊になって付いています。この実の中に種子が出来ていて、晩秋には硬い皮が割れて反り返り種子を飛ばします。コクサギは雌雄異株の低木の植物で、雌花には一個の花が枝に張り付くように咲いています。雄花は長く伸びた茎に花が集まって咲いています。







1_ コクサギ（右上は実の部分を拡大したもの）
2_ 11月、実に割れ目ができる 3_ 雌花 4_ 雄花（2、3、4は清水さん提供写真）

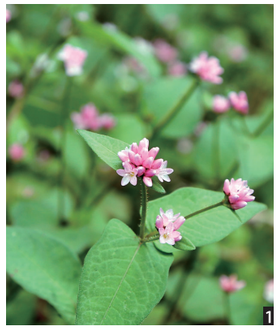
撮影日：8月31日 (H28)
撮影地：雁田山



No.30 クサギのような匂いのする小さい木なのでコクサギ（小臭木）とされますが、クサギはクマツヅラ科で、コクサギはミカン科ですので別物です。

No.55 水辺の植物「ミゾソバ」と「オオミゾソバ」

ミゾソバは夏から晩秋にかけて水辺に咲く花です。名前の由来は溝に繁茂するソバの仲間という意味で、花には花びらがなくガクが花びら状になっています。オオミゾソバは、ミゾソバより大きめですが、大きさでの区別は困難です。ポイントは葉と茎をつなぐ部分の付け根にある托葉の形で、ミゾソバの托葉は、先が細かく切れ、茎に巻きついています。オオミゾソバの托葉は、丸く茎を巻いています。雁田山麓では両方見ることができます。





撮影日：10月5日（H28）
撮影地：雁田山

1_ミゾソバの花。花の色は白や、薄紅色、紅色とさまざま 2_ オオミゾソバの托葉 3_ 高さ30㎝～1mほどに成長し群生する



ミゾソバの葉は、牛の頭部を正面から見た形をしており、ウシノヒタイという別名もあります。

No.56 春の花と秋の花咲く「センボンヤリ」

キク科のセンボンヤリは、一年に2回花が咲きます。春は葉の間から5～10cmの茎を1、2本出して、先端に白い花を咲かせます。これに対し、秋は葉の間から30～50cmくらい茎を伸ばし、先端に細長い蕾を作ります。秋の花は閉鎖花といい、開花せず、蕾の中に種子ができます。種子ができると褐色の毛がタンポポのように開きます。この様子から千本槍と名前が付けられました。




撮影日：10月31日（H28）
撮影地：雁田山

左_秋、種子ができ、開いた蕾（右下は閉鎖花）
上_春の花。裏が紫色をしているので「ムラサキタンポポ」とも言われる
（上写真、清水さん提供）



大名行列の毛槍（先端に羽毛をつけた儀式用の槍）に似るからセンボンヤリです。槍が千本なのでなく、千人行列の先頭の毛槍ということです。

No.57 薬草茶として利用された「カワラケツメイ」

9月から10月、松川の河原で黄色い小さな花に出会います。マメ科のカワラケツメイです。細かい葉が羽状についた状態からマメ科を連想しますが、花の形だけ見るとマメ科には思えないかも知れません。花が終わると細長いマメのさやになり、その中にたくさんの実ができます。実が熟すとさやが黒くなって種子をまき散らします。11月の下旬には黒いさやがたくさん枝に付いています。小布施では非常に貴重な植物です。





撮影日：10月5日、11月30日（H28）
撮影地：松川堤防

1_6㎜程の黄色い小さな花 2_草丈30㎝程、黒いさやをたくさん付ける 3_松川の河原で砂地の場所に生えている



松川の河川敷に生えていましたが、最近は草むらに覆われて確認できません。草むらの下の方に生育しているかもしれません。

No.58 早春の花、町の普及花「ミスミソウ」

雁田山にエドヒガン（桜）やキブシの花が咲く3月下旬頃、林床にミスミソウの花が咲きます。かつて都住小学校の校章として輝いていたミスミソウは細長い茎を伸ばし、その先に花を一つ付けます。一枚の葉が三つに分かれ、一つ一つの先がとがっている様子からミスミソウ（三角草）と名づけられました。早春に咲くためユキワリソウと呼ぶこともあります。雁田山のミスミソウの大半は白い花ですが、まれに薄く赤みを帯びたものもあります。





撮影時期：3月ごろ
撮影地：雁田山（清水さん提供写真）

1_ミスミソウには花びらがなく、ガクが花びら状になっている 2_先端がとがった葉 3_珍しい薄赤色の花



ミスミソウは町の花として広く知られています。ミスミソウをユキワリソウとも言いますが、高山植物にサクラソウ科のユキワリソウがあります。

No.59 出会いが難しい「マルバコンロンソウ」

雁田山の雪が消え、春の花が咲き出す4月、林の中に茎の先に集まって咲く白い小さな花を見かけます。アブラナ科のマルバコンロンソウです。花びらは4枚で、1本のめしべと6本のおしべがあり、草丈は10cm～15cm。先端の葉が大きいのが特徴で、細かな毛が茎や葉に密生しています。絶滅危惧種ではありませんが、これまでに雁田山以外では見たことがなく、しかも特定な場所でしか見ることができない珍品です。





撮影日：4月（清水さん提供写真）
撮影地：雁田山

1、2_集まって咲く花。花のおしべ6本のうち、4本がやや長い 3_葉や茎の全体に毛が生えている



コンロンソウより葉が丸いのでマルバコンロンソウといいます。中国の崑崙山脈に降る雪のイメージからコンロンソウとする説があります。

No.60 その美しさに驚く「カラマツの花」

3月下旬から4月上旬、カラマツの芽吹きが始まると、枝先に花が咲きます。カラマツはマツ科の植物で、雄花と雌花が一本の木につきます。

カラマツの花には花弁がありません。雄花はたくさんの雄しべが集まって丸く、下向きについています。雌花は少し紅色をした鱗片が集まって楕円形をしていて、上向きに咲きます。小布施ではカラマツの花を二箇所で見ることができますが、いずれも植樹したものです。





撮影日：4月（清水さん提供写真）
撮影地：雁田山

1_雌花。カラマツは深い山に生える樹木で、近くでは志賀高原や五味池などに自生 2_雄花 3_実



成長が早いためよく植林されました。材としては割れや狂いが出やすく使いにくかったのですが、最近の技術で合板などによく使われるようになりました。

No61 日本の固有種「スギ」

スギはスギ科の木本性の植物で日本各地に自生しています。ヤクスギ、クマスギ、アキタスギなどのスギが全国各地にありますが、どれも同じスギです。寿命が長く、屋久島には樹齢3,000年といわれるものもあります。雌雄同株の樹木で3月中旬から4月にかけて開花し、雄花が花粉をまき散らします。風が激しいときは黄色い雲のように花粉が広がっていきます。雌花は葉の先に1個付きます。受粉して球形の実になり10月ごろ熟します。


撮影日：3月31日(H29)
撮影地：雁田山



1_ 花粉症の人には嫌われるが、有用樹木として全国で植林されている
2_ 雄花 3_ 雌花。熟すとマツボックリに似た実に


ヤクスギ・クマスギ・アキタスギなど、産地で名前を付けているだけで、ものは同じです。

No62 初夏の山に白い花が咲く「ウワミズザクラ」

雁田山にエドヒガンの花が咲き、カスミザクラやヤマザクラの花が咲き終わる頃、白い花が房状に咲くのを見かけます。バラ科のウワミズザクラです。密集して咲く小さな花には、たくさんの雄しべが花弁の上に広がっています。雌しべは1本で、この花から小さい実がたくさんできます。千年樹の里にはウワミズザクラの大木が数本あります。かつてここが自然林に覆われていた頃の名残を残す小布施の原風景ともいえる場所です。


撮影日：5月8日(H29)
撮影地：千年樹の里



1_ 社協デイサービス前のウワミズザクラ 2_ 6～8cmの房状の白い花が密集して咲く 3_ 花弁よりも長いたくさんの雄しべ


「ウワミズ」は、古代この木の上面に溝を彫り、亀甲占いに用いたため、上に溝を彫る桜（上溝桜）とされたことに由来します。

No63 童は見たり野中の薔薇「ノイバラ」

初夏、真っ白なバラの花を見かけます。ノイバラの花です。ノバラとも言います。時には薄く淡い紅色をしている花も咲きます。ノイバラは枝分かれを繰り返し成長していくので小さな茂み状になり、花は枝先に密集します。秋に赤い小さい実ができますが、硬い実で食べることはできません。雁田山の麓や松川の堤防、畑の縁の茂みでも見られます。


撮影日：6月5日(H29)
撮影地：雁田山



1_ 雁田山麓に咲くノイバラの花 2_ 花弁は5枚あり、頭部が少しくぼんでいる 3_ ノイバラの実
(2、3は清水さん提供写真)


もともとバラは茨（イバラ）と呼ばれていました。野生のイバラだからノイバラです。

No64 雁田山にも「マタタビ」の花が咲く

マタタビは、雄花をつける雄株と両性花をつける雌株があります。雁田山には、かつて雌株があって実が確認できましたが、山道整備の際に姿を消してしまい、今は雄株しか確認できません。雄花は白い花弁が5枚、たくさんの雄しべがあり、1箇所に2、3個集まって咲きます。つるが高く巻き上がるので、観察は困難です。実は熟すと黄褐色になり、甘くておいしいです。実を青いうちにとって塩漬けや焼酎漬けにします。


撮影日：7月2日(H29)
撮影地：雁田山



1_ 2㌢ほどのマタタビの雄花。マタタビ科、つる性の樹木。2_ 両性花の雌花 3_ 熟した実（2、3は清水さん提供写真）


旅人がこの実を食べると、元気が出てまた旅が続けられるという意味からマタタビと呼ばれます。

No65 日本の在来種　「タケニグサ（ケシ科）」

タケニグサは不釣合いに大きい葉と花の咲く姿から、帰化植物と思わせますが、平地から亜高山（志賀高原、菅平高原）でも見られる在来種です。花には花弁は無く、多数の雄しべと一本の雌しべがあります。開花後、細長い実が房のように集まっていて、その中に小さな種子が出来ます。名前の由来は、タケノコと一緒に煮るとタケノコが軟らかくなるという説と茎が中空で竹に似ているからという説がありますが、定かではありません。


撮影日：7月28日(H29)
撮影地：雁田山



1_ 高さ1～2mほどに達する。茎や葉柄（ようへい）を切ると有毒の黄褐色の液が出る 2_ つぼみと花 3_ 実（2、3は清水さん提供写真）


内服すると中毒を起こす毒を持ちますが、かつては皮膚病や水虫に塗布して薬としても使用していました。

No66 小布施に咲いた「ヤハズソウ」の小さな花

ヤハズソウは小形のマメ科の植物で近年、見る機会が少ない植物の1つです。この花は松川の河川敷で人の踏みつけを避けて群落状になっていました。根元から茎をたくさん出して、葉を互生に付けます。

一枚の葉は三枚に深く切れていて、葉の付け根に小さい花を付けます。楕円形の葉を強く引くと、葉脈のところから2つに切れてV字になります。その形が弓矢の矢の根元（矢筈（やはず））の様な形をしているため、その名前が付けられました。


撮影日：9月7日(H29)
撮影地：松川河川敷



1_ 草丈は10cmから20cm。日当たりの良い道端や草原に生える 2_ 花の下に3枚の葉がある 3_ V字にちぎれた葉


作家の永井荷風は、ヤハズソウを題材にした随筆「矢はずぐさ」を書いています。

No.67 藍色のガクが特徴の「イシミカワ」

イシミカワはつる性の植物で、茎や葉柄にトゲがたくさんあり、葉は三角形をしています。花弁がなく、ガクが丸くなっており、中に雄しべ８本と雌しべが１本あります。雄しべや雌しべはガクに包まれているので、外からは見えません。ガクは白色をしていますが、次第に青色や藍色に変わり、硬い黒色の果実を包みます。この果実の中には硬く白い実があります。河原や道端に見られると言われますが、小布施では貴重な植物の一つです。





撮影日：10月4日 (H29)
撮影地：松川 (千曲川河川公園)

1_ 茎にトゲがあり、他の草木にからみつく 2_ 藍色のガク。黒い果実を包んでいる 3_ 白色のガクと三角形の葉 (9月撮影)



中国では解熱の生薬とされますが、アメリカでは外来植物として警戒されています。

No.68 晩秋の山の赤い実―「サルトリイバラ」

晩秋の雁田山にサルトリイバラの赤い実が、季節に取り残されたかのように枝に光っています。

サルトリイバラはつる性の植物で、節々に鋭いとげがあり、そのとげに猿もひっかかりそう。というところから名付けられました。雌雄異株（しゆういしゅ）の植物で５月ごろ花が咲き，緑色の丸い実が秋に赤く熟します。サルトリイバラ科の植物は、他にシオデとヤマガシュウがあります。サルトリイバラ科の植物をすべて見ることができるのが雁田山です。





撮影日：11月8日 (H29)
撮影地：雁田山

1_ 赤く熟したサルトリイバラの実 2_夏頃の実
3_ サルトリイバラ科のシオデの実。仲間のヤマガシュウの実も黒く熟す



サルトリイバラ科の植物は、かつてはユリ科に分類されていましたが、10年くらい前に見直しがされてユリ科から分離されました。

No.69 「マメガキ」が熟する初冬の小布施の里

西アジア地方原産のマメガキは、中国を経由して日本に入り栽培されてきました。かつては小布施でも所有していた家がありましたが、現在は松川の堤防でしか見られません。実から染料を作るため栽培されていたと考えられますが、確かなことはわかっていません。古来、信濃の国で多く栽培されていたので、シナノガキの別名があります。実は晩秋、霜が降りる頃、黒く熟し甘味が出てきて食べられますが、渋味が残ります。






撮影日：12月2日 (H29)
撮影地：松川堤防

1、2_ マメガキの実。直径は２㎝ほど 3_10月頃の実 4_雌花。普通の柿と異なり雄株と雌株がある



柿渋は防虫効果や防腐効果を持ち、染料や外壁の塗装などに用いられました。

No.70 緑の実が寒さに耐え春を待つ「ヒメアオキ」

ヒメアオキはミズキ科の植物で、北信地方では数少ない常緑樹の１つです。北海道南部から本州の日本海側の北陸地方まで広く分布していて、雁田山でも時々見かけます。雌雄異株の植物で５月の初旬ごろ花が咲きます。実は楕円形をしており、冬に赤く色づくものもありますが、多くはそのまま冬を越し、翌年の春に赤く艶のある実となります。雌株に、花と前年の赤い実が同時に付いているのを見ると、不思議な感覚に打たれます。






撮影時期：12月25日 (H29)
撮影地：雁田山

1_ ヒメアオキの樹高は１ｍ以下。庭木として植えられるアオキの変種でもある 2_ 春を待つ緑色の実 3_雄花 4_雌花



小型のアオキなのでヒメアオキです。ヒメアオキは積雪に適応しているため、北海道や本州北部の日本海側でも見られます。

No71 雄花も雌花もある「オニグルミ」

雌雄同株の木本性植物であるオニグルミは５月頃にひも状の花を咲かせます。この花は雄花が集まったもので、一つ一つにガクや数個の雄しべがあります。雌花は芽の先端にあり、一本の茎に数個集まっていて、細長い子房の先に赤色の花柱（雌しべ）が２本付いています。この子房が実となり、成熟すると表面の皮が剥げ、中から硬い核に包まれた種子が出てきます。この核の様子から「オニ」の名が付きました。中の種子は食用です。





撮影日：5月 (写真2、3は10月)
撮影地：雁田山・千曲川堤防

1_ 雄花は緑色でひも状。雌花（左下）は赤色で直立 2_オニグルミの木 3_黒い核が現れた実



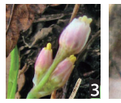
市販されるカシグルミ類（テウチグルミやシナノグルミ）よりも小さく硬いですが、味は濃厚で保存もききます。オニグルミは赤い花、カシグルミは白い花が咲きます。

No72 春の山にひっそり咲く「ヒメニラ」の花

ヒメニラは、早春の花「カタクリ」が咲く頃、同じような環境に咲くユリ科の多年生植物です。

細長い２枚の葉の間から茎をのばし、１～３個の小さな花をつけます。雁田山にも生育していますが、花が小さくて目立たない上、夏には葉が枯れてしまうので、気付かれることはほとんどありません。ルーペで見ると、たまらなくかわいい花です。雌雄異株の植物で雄株と雌株があり、雄花と雌花がそれぞれの株に咲きます。






撮影日：3月 (清水さん提供写真)
撮影地：雁田山

1_ ヒメニラ。咲く花には白いものと紫がかったものがある 2_ カタクリの花とヒメニラ 3_雄花 4_雌花



小型のニラだからヒメニラです。とても細いのですが、食用とされることもあるようです。

No.73 雁田山に春を告げる「福寿草」の群落

フクジュソウはキンポウゲ科の多年生植物。3月初旬に芽を出すと、間もなくガクに包まれたつぼみができ花が咲きます。花にはガクと花弁があり、花弁の内側に雄しべと雌しべがあります。キンポウゲ科には花弁が無く、ガクが花弁状の植物も多くありますが、この花はガクも花弁もあります。県の準絶滅危惧種に指定される貴重な花です。ガクの長さが花弁の半分ほどのミチノクフクジュソウもありますが、雁田山では見つかっていません。





1_ 3㎝ほどの小さな花が咲く。春を告げる代表的な花2_ ガクに包まれたつぼみ3_ 球状のそう果から出ているのが雌しべ

撮影日：3月30日（H30）
撮影地：雁田山

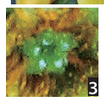


フクジュソウは食用と勘違いして食べる人がまれにいますが、毒があるので注意です。勘違いで道の駅で売られていることもありますが、危険です。

No.74 花が咲き実もできる「ヤマブキ」の花

雁田山の桜の花が散る頃、山すそにヤマブキの黄色い花が一斉に咲きだす様子は実に見事です。ヤマブキは雌雄同株のバラ科の植物です。花の作りは、花弁が5枚とガクが5枚あります。花弁の中に多数の雄しべがあります。雌しべは雄しべに覆われていて外からは確認できません。雄しべを取り去ると、小さな粒が5個並んでいて先端に小さな雌しべがついています。5個の粒が受粉して黒い実ができますが、この実に気づく人はまれです。






1_ ヤマブキの花　2_ 花弁と雄しべ3_ 雌しべ
4_ ヤマブキの実（2、3、4は清水さん提供写真）

撮影日：4月25日（H30）
撮影地：雁田山



七重八重　花は咲けども　ヤマブキの　実の一つだになきぞ悲しき
太田道灌（おおたどうかん）の山吹伝説で知られる花ですが、実はよく探すとあります。

No.75 雁田山の湿地植物「ネコノメソウ」

ネコノメソウは山地の湿った所や湿地で見ることができるユキノシタ科の多年生植物です。花びらが無く、花は4個のガクと4本のオシベ、1本のメシベからできています。開花後、上側に細い線が入った丸い実ができます。種子が熟して実の上の線が割れると、中に黒色の小さな種子がたくさん入っています。この種子の様子が昼間の猫の細い目のように見えるところからネコノメソウと名付けられました。






1_ ネコノメソウの群落
2_ ネコノメソウの花
3_ 猫の目になった種子
4_ 種子が落ちた状態（2、3は清水さん提供写真）

撮影日：6月1日（H30）
撮影地：雁田山



昔は山の上の方にありましたが、川の流れとともに移動し、今は雁田山の入り口の川辺に群生しています。

No.76 小布施に咲く夏を呼ぶ花「ノリウツギ」

ノリウツギはユキノシタ科の木本（もくほん）植物で、アジサイと同じ仲間です。花の作りは、大型のガク片が集まっている装飾花と小型の両性花があります。両性花はたくさん集まっていて、ガクと花びらが5枚、雄しべが10本、雌しべが1本あります。名前は幹の内皮に糊（のり）分があって、紙をすく時にこの糊を使うことに由来しています。北海道ではこの花をサビタと呼んでいて、「サビタの花」という歌もあります。






1_ 松川沿いに咲くノリウツギ2_ 装飾花3_ 5枚の花びら4_ 10本の雄しべ（2、3、4は清水さん提供写真）

撮影日：6月25日（H30）
撮影地：松川



アジサイは6月～7月に咲きますが、ノリウツギはアジサイの花が終わるころに咲くアジサイの仲間の花です。

No.77 湿地近辺の夏の花　「ニガクサ（シソ科）」

ニガクサはシソ科の植物で湿原や湿地周辺の草むらにある植物です。仲間の植物にオドリコソウがあります。花は上唇の花弁と下唇の花弁からできていて、雄しべが4本と雌しべが1本あります。開花する時は、まず雄しべと雌しべが蕾（つぼみ）から突き出してきます。その後上唇は二つに別れ、雄しべと雌しべの下に伸び出します。下唇は三つに別れ、真ん中の部分が垂れ下がり、一見すると下唇が花弁全体のように見えています。





1、2_ ニガクサの花3_ 上に伸びる雄しべと雌しべ。その下にあるのが2つに別れた上唇と、3つに別れ真ん中が垂れ下がった下唇（2は清水さん提供写真）

撮影日：7月26日（H30）
撮影地：雁田山



ニガクサは苦草と書きますが、えぐみはあるが苦みはありません。

No.78 小布施にもある「エゾノコリンゴ」

長い柄の先に1㎝にも満たない丸くて赤い実が下がっています。栽培種のリンゴと同じバラ科の仲間ですが実をつないでいる柄が長いのが特徴です。エゾノコリンゴは北日本に分布する植物で長野県ではめったに見ることができませんが、町内で2本確認しています。4月にリンゴのような真っ白な花が咲き、間もなく小さな実ができて直径1㎝ぐらいに成長します。小布施町の絶滅危惧種の一つと言っても過言ではない木本（ぼんもく）性の植物です。






1_ 白い花（4月23日撮影）2_ 初夏の青い実（6月17日撮影）
3_ 赤く色づいた実4_ エゾノコリンゴの木（3、4は8月27日撮影）（1、2は清水さん提供写真）　撮影地：雁田（H30）



蝦夷の名の通り北海道で多く見られるりんごの仲間ですが、長野県でも野生種が確認されています。

No.79 タデ科の「イヌタデ・アカマンマ」

アカマンマと聞いて幼少の頃を連想する人も今はほとんどいなくなりました。アカマンマはタデ科のイヌタデの花のことで、赤くて細長い実をご飯粒に見立てて、子どもがままごとをしていた事に由来しています。イヌタデの花には花弁が無く、5枚のガクが花弁のように開いていて、その中に雄しべと雌しべがあります。長い穂状のところに赤色の小さな花が密集して咲いている様子は、秋の印象的な風情ともいえます。





1_群生するイヌタデ
2_イヌタデの花 3_イヌタデの実（3は清水さん提供写真）

撮影日：10月1日（H30）
撮影地：雁田せせらぎ緑道



イヌタデのイヌは本物とは違うものにつけます。他にもイヌゴマやイヌビワなどが挙げられます。ただし、オオイヌノフグリは犬の意味です。

No.80 「エノキ」は一里塚の木

エノキはニレ科で野生の樹木です。昔は交通の要所に植えられ、一里塚の目印に植えられていた所もあります。春に花が咲き、小粒の丸い実がたくさんつきます。10月になると実が色づきはじめ赤色になって熟します。この木の根元に出たキノコを人工培養し生産につなげたのがエノキダケです。昭和20年末に屋代高校の先生が研究し松代町で生産に乗せました。松代町に「エノキダケ発祥の地」という看板があることはあまり知られていません。




1_千曲川河川敷にそびえるエノキの大木 2_赤く色づき熟した実

撮影日:10月29日（H30）
撮影地：千曲川河川敷と玄照寺（2は清水さん提供写真）



エノキは縁の木ともされ、縁結びや縁切りにも使われます。左写真、野生のエノキは今は見られません。

No.81 ウルシと間違えられる植物「ヌルデ」

ヌルデはウルシ科の低木木本性の植物で、雁田山や松川の堤防近くで見ることができます。ヤマウルシに良く似ていますがヌルデではかぶれることはありません。ヌルデの花は8月ごろ、枝先にたくさん集まった状態で咲きます。実は5㎜ぐらいで、熟すと白い粉に覆われ、この時に実をなめると塩辛さを感じます。毒ではないので興味のある人は試してみてください。晩秋には熟した実が垂れ下がりヤマウルシと同じような状態になります。





1_8月のヌルデの木（H30）
2_ヌルデの花 3_白い粉に覆われた実（全て清水さん提供写真）

撮影地：雁田山



Ｎｏ．15イボタノキはガの幼虫が寄生しましたが、ヌルデはヌルデシロアブラムシが寄生して虫こぶを作ります。この虫こぶは天然塗料や漢方薬に使われました。

No.82 「ツルマサキ」

ツルマサキはニシキ科のつる性の常緑植物です。山に入ってツルマサキの前に行っても気付く人は少ないと思います。つる性の茎から糸のような細い根を出して周りの木の幹に張りつくようにして這い上がります。7月ごろ緑白色の花が咲き、秋に実が熟すと仮種皮が割れて中から赤い実が出てきます。雁田山にもツルマサキに巻きつかれた木が何本もあります。立ち木を利用して成長していきますが、寄生植物ではありません。






1_ツルマサキが這い上がって一本の木のようになっている（撮影：戸隠高原）2_サクラの木に貼りつくツルマサキ 3、4_仮種皮から出てきた赤い実（1、2は清水さん提供写真）

撮影時期：11月～12月
撮影地：雁田山（2～4）



寄生植物とは、ヤドリギのように他の樹木の組織から水分や養分を奪うものです。このツルマサキはよじ登り植物で巻き付くだけです。

No.83 「クリ」にも雄花と雌花が咲いている

6月、小布施の町はクリの花の香りに包まれます。クリにも雄花と雌花が咲きますが、雌花は気付くのが困難です。長いひも状に下がっているのは雄花で、花弁の無い花が並んで咲いています。雌花は、雄花のひもが枝から伸び出す辺りにあり、鱗片のある総包に包まれていて、中に3個の花が入っています。雌花の鱗片が、受粉後イガになります。イガの中にクリの実が3個入っているのは、総包の中に花が3個入っているからです。






1_クリの花 2_雄花と雌花 3_雄花 4_雌花（全て清水さん提供写真）



クリは町の木です。りんごの栽培が増えたり、クリタマバチの被害を受けたりで生産が減ったこともありましたが、最近は手のかからない果樹として作付けも増えています。

No84 雁田山で春を知らせる「エドヒガン」

3月下旬になると、雁田山のすべり山登山口の所にある大きなサクラの木が、かすかな紅色の花を開花させます。山の木々が芽吹く前に開花するので「葉が無い」から「歯がない」となり「姥ヒガン」とも言います。このころ雁田山を見ると、中腹あたりに転々と、エドヒガンが咲いているのを見ることができます。4月中旬ごろになり、少し山の色が変わり始めるとエドヒガンに代わってカスミザクラが咲き、次いでヤマザクラが咲いて、山は春の色に変わっていきます。





1、2_すべり山登山口に咲くエドヒガン 3_エドヒガンのあと、山の色の変わり始めと共に咲くカスミザクラ（全て清水さん提供写真）



エドヒガンはサクラの中では最も長寿で巨木に育ちやすく、中島千波さんの「樹霊淡墨桜」、「山高神代桜」、「三春の瀧桜」などにも描かれています。

No.85 貴重な植物「ナニワズ」

ナニワズはジンチョウゲ科の雌雄異株（しゆういしゅ）の木本性植物で、３月～４月に黄色の花を咲かせ、夏の頃になると丸い実が赤く熟します。県内では北部に分布が限定され、これまで小布施町にあることは記録されていませんでしたが、このたび長野県の植物目録に正式に登録されました。今回紹介した花は雄花ですから赤い実を見ることはできませんが、参考までに戸隠高原のものを紹介します。長野県では絶滅危惧１Ｂ類に指定している貴重種です。





1_ ナニワズ 2_ ナニワズの花
3_ 赤い実（戸隠高原で撮影）
（3は清水さん提供写真）
撮影日：3月29日(H31)
撮影地：雁田山



仲間の植物にオニシバリ（ナツボウズ）がありますが、長野県では未確認種です。

・・・

No.86 すてきな形の「ミヤマウグイスカグラ」の花

ミヤマウグイスカグラはスイカズラ科の木本性の植物です。雁田山にサクラの花が咲く頃、林の中で紅色の小さな花を見かけることがあります。細長い筒状の花で、筒の先が五つに分かれ、横に開いています。全県的に分布し、雁田山の標本が県の標本室に保存されていることが「長野県の植生」に記録されています。花の後、楕円形の細長い実がぶら下がり６月の末から７月にかけて熟して赤色になります。この赤い実を食べた経験を思い起こす人もいると思います。郷愁を誘う赤い実です。





1_ ミヤマウグイスカグラ 2_ 筒状の花。中には５本の雄しべと１本の雌しべがある 3_ 赤く熟した実
（3は清水さん提供写真）
撮影日：4月25日(H31)
撮影地：雁田



葉や実に毛があるのがミヤマウグイスカグラで、毛が無いのがウグイスカグラです。

・・・

No.87 初夏の花「オドリコソウ」

オドリコソウはシソ科の多年生草本で、花が咲いている様子が帽子をかぶった踊り子が円くなって踊っている姿に似ているというところから名づけられました。かつて私たちの周りでは田んぼ道や山裾の道を歩けばどこにでもあって、子どもたちが花を抜き取り花の下の所を吸って蜜の甘さを楽しんでいました。外来種がたくさん進入し環境が変化すると、オドリコソウは生育場所を奪われ、今では山地の道沿いや畑の隅に追いやられ、限られた所にしか生育していません。




撮影日：5月30日(R1)
撮影地：雁田山



どこでも見かけるピンクの花を咲かせるヒメオドリコソウはオドリコソウの仲間の帰化植物です。

No.88 サトイモ科の植物「セキショウ」

雁田山の裾（すそ）、せせらぎ緑道に沿って流れる小川の一部にセキショウが生育しています。セキショウは、水辺に生育するサトイモ科の常緑植物です。細長い葉の植物で、葉の中に隠れるように細長い軸に小さい花が密集して付いています。この花は人に気付かれることはほとんどありません。今では小布施町でも特定の場所でしか見られない植物になりました。サトイモ科の植物には、ショウブ、ミズバショウ、コンニャクなどがあります。せせらぎ緑道を歩く機会があったら探してみてください。




1_ セキショウの株
2_ セキショウの実

撮影日：6月24日(R1)
撮影地：せせらぎ緑道





石につくショウブでセキショウです。昔はショウブ湯にショウブの代わりに使ったこともあるようです。

・・・

No.89 名前の由来がおもしろい「イタチササゲ」

イタチササゲは、山際の草地の中に生えているマメ科の多年生草本の植物です。葉の付け根（葉柄（ようへい））から一本の軸が伸び、そこに花がたくさん付きます（総状花序（そうじょうかじょ））。花はやや下向きに咲き花びらの先が上に反っています。花は、始めは黄色をしていますが、間もなく茶色がかかった色に変わり、小さな豆が10粒ほどはいった実がなります。イタチササゲの名前の由来は、黄色の花が茶色っぽく変化した色が、動物のイタチの毛の色に似ているというところから付けられました。






たった10日間で大きな変化を遂げました
1_ 咲き始め（7月20日） 2_ 花の色が茶色に変化（7月25日）
3_ マメができている（7月30日）　　撮影地：雁田山(R1)



イタチササゲ、カラスノエンドウ、スズメノエンドウなど動物の名前をつけた植物がたくさんあります。

・・・

No.90 帰化植物「ブタクサ」と「オオブタクサ」

ブタクサもオオブタクサもキク科の帰化植物で、秋には花粉症の人が迷惑を被っています。私たちがブタクサと呼んでいるのは、正式な名前は「オオブタクサ」で、花期は８月末から10月頃までです。草丈は大きくて４ｍ位になるものもあります。

一方「ブタクサ」は草丈がせいぜい１ｍ位。葉が大きく切れこんでいて、オオブタクサとは容易に区別できます。花期は、８月から９月です。この近くでは、菅平高原の峰の原スキー場の駐車場に群生しています。

撮影日：8月27日(R1)
撮影地：雁田





1_3メートルまで伸びたオオブタクサ 2_ オオブタクサの花 3_ 菅平高原に群生するブタクサ



虫が花粉を運ぶ（虫媒花（ちゅうばいか））のではなく、風が花粉を運ぶ（風媒花（ふうばいか））ため、花粉を大量に放出し、秋の花粉症の原因となります。スギやヒノキも風媒花です。

No.91 カラマツソウの仲間の「イワカラマツ」

雁田山の岩場で新しい植物に出会いました。キンポウゲ科のイワカラマツです。名前の通り岩場に生え、草丈は30㎝から50㎝で花期は６月から８月です。雁田山で７月下旬に見たときは、岩の上に横になっていました。９月下旬には葉が岩の上に広がっていました。イワカラマツは、日本固有の植物で絶滅危惧種に指定されています。小布施町では、先のナニワズに続く絶滅危惧植物の発見で、大変貴重な植物の１つになります。



1_７月(R1)のイワカラマツ。岩の上で横になっていた
2_ イワカラマツの花
3_９月(R1)のイワカラマツ



イワカラマツは環境省カテゴリー絶滅危惧ⅠＢ類、長野カテゴリー絶滅危惧Ⅱ類の希少種です。

・・・

No.92 存在感が薄い花 タデ科の「ハナタデ」

秋に雁田山のせせらぎ緑道を歩くと、イヌタデやミゾソバなどタデ科の植物の花が目に付きます。そんな中で、咲いていても人目にとまらないのがハナタデです。ハナタデは、かつてはヤブタデとも言われていました。タデ科の花は花びらがなく、ハナタデは５枚の硬いガクに包まれていて、その中に１本の雌しべと７～８本の雄しべがあります。しかし、あまりにも小さいので確認は困難です。原野を散策する機会があったら、この小さな花を探し観察してみてください。



1_ ハナタデ 2_ ハナタデの花 3_ ハナタデとミゾソバ
(３は清水さん提供写真)　撮影地:雁田山(R1)



ハナタデはイヌタデのように花が密着することがなく、まばらに咲きます。

・・・

No.93 シダ類の仲間の植物「フユノハナワラビ」

フユノハナワラビはシダ類の「ハナヤスリ科」の多年生の草本です。９月の中旬ごろ芽を出し、翌年の３月ごろまで残っています。冬にも葉が残ることと、胞子葉を花に見立てて、こう名づけられました。シダ類の植物ですから、花は咲きません。通常草丈が20㎝位になります。今回、雁田山で10㎝位の固体が群生しているところを見つけました。冬の間も緑色をしているのですが、11月に確認した時は茶色がかっていました。これは水分不足の状態と考えられます。



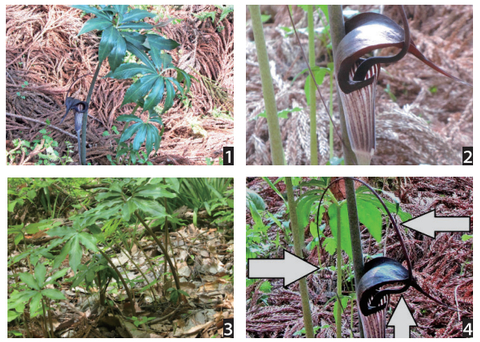
1_10月28日撮影
2_11月26日撮影
(水分不足で葉が茶色に)
撮影地:雁田山(R1)



山菜のワラビはウラボシ科（※編集注：現在はコバノイシカグマ科とすることが多いようです）で食用、フユノハナワラビはハナヤスリ科で食用にはなりません。

No.94 みんなで見守ろう「ウラシマソウ」

ウラシマソウはサトイモ科の多年生植物で、絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。花の中から一本の糸が長く伸びていて、花の形と共に珍しい形をしています。この糸を浦島太郎の釣り糸に見立てて、名前が付けられました。ウラシマソウの仲間にはミズバショウ・ザゼンソウ・コンニャクなどがあります。雁田山には、10年くらい前までは４箇所に群生していましたが、今では探すのが困難になってしまいました。原因は、つる植物のクズに覆われてしまったことと、盗掘によるものと考えられます。



1_ ウラシマソウの花と葉
2_ ウラシマソウの花
3_ 群生するウラシマソウ
4_ 花から伸びる１本の糸
撮影地:雁田山
(全て清水さん提供写真)

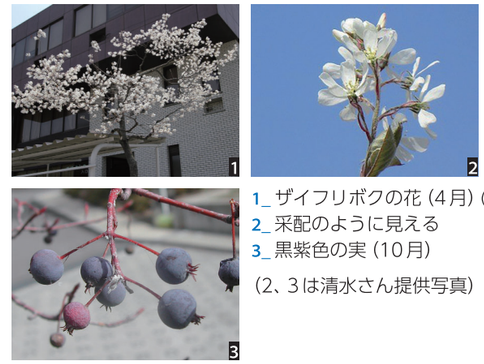


ウラシマソウに限らず、雁田山では希少種が盗掘と見られる被害を受けています。株をとらずに写真だけ撮って、雁田山の自然を大切に守りましょう。

・・・

No.95 役場の庭に「ザイフリボク」の花

役場の駐車場沿いの郵便ポストの近くに一本の木があります。これがバラ科のザイフリボクの木で、漢字で「采振木」の字をあてます。花がまとまって咲いている様子を采配(さいはい)に見立てて付けたものです。長野県でもまれに見られる情報はありますが、雁田山では確認していません。役場の駐車場を整備する時に、珍しい植物のひとつとして取り入れられたものと思われます。４月に白い花が咲き、秋には黒紫色の丸い実が熟します。



1_ ザイフリボクの花（４月）(R1)
2_ 采配のように見える
3_ 黒紫色の実（10月）
(2、３は清水さん提供写真)



しめ縄などに付いている紙のシデに似ていることから、シデザクラという別名もあります。

・・・

No.96 早春の木本植物「ツノハシバミ」

ツノハシバミは、カバノキ科の低木植物です。雁田山にエドヒガンの花が咲く頃、ひも状の雄花がたくさん下がっている姿を見ることがあります。このひも状のものは、ツノハシバミの雄花で、ひもの中に花粉が入っています。雌花は小さいので、近くで確認しないと分かりません。芽鱗(がりん)（ガク状の形態）の中から紅い花柱が何本も伸び出していて、反り返っています。堅果(けんか)（固い実）には先が曲がった細長い角があります。この角があることからツノハシバミの名前がつけられています。



1_ ひも状の雄花
2_ 雌花。紅い花柱が伸びて反り返っています
3_ 細長い角が特徴の実
(全て清水さん提供写真)



ヘーゼルナッツはセイヨウハシバミの堅果です。このツノハシバミの堅果もナッツとして食用になり、料理や菓子の原料ともなります。

No.97「春の七草ホトケノザ」は「コオニタビラコ」

3月の中旬から4月の中旬に田んぼに行くと、水田の中や畦の辺りで黄色い小さな花を見ることがあります。キク科のコオニタビラコで、春の七草のホトケノザがこれです。水田で葉を地面に広げている姿から田平子と名づけられました。根葉が横に広がっていて、その中央が仏様の座られる場所に見立てています。実は、野生の植物にシソ科のホトケノザもあり、これが春の七草のホトケノザと間違えられることがあります。上部の葉は葉柄が短く茎を抱いたようになっています。そこに花が咲き、この姿からホトケノザと名づけられています。





1_ キク科のコオニタビラコ
2_ シソ科のホトケノザ

撮影日：3月31日(R2)
撮影地：延徳田んぼ
(2は清水さん提供写真)



シソ科のホトケノザを食べた方から、「こんなものを七草で食べるのか」といわれました。No.14でも言いましたが、七草のホトケノザはコオニタビラコの方です。

・・・

No.98 花を探してみよう「ウスバサイシン」

雁田山でエドヒガンの花が散る頃にウスバサイシンの花が咲きだします。ウスバサイシンはウマノウズクサ科の多年生植物で山地の木陰に生えています。春に根本から2本の茎が伸び、その先にハート型の葉が付いています。2本の茎の間に黒紫色の花が一つ咲きますが、株の根本に咲いているので気付かれることはありません。花の花弁状の黒紫色の部分はガクで花弁はありません。花の中を見ると中央部に太い雌しべが1本ありますが、その先が大きく6個に分かれています。6個の雌しべの外側に雄しべが2本付いていて、数は12本になります。







1_ ハート型の葉 2_ 2本の茎の間に咲く花 3_ 6個に分かれた雌しべと12個の雄しべ（3は清水さん提供写真）
撮影日：4月27日(R2)　撮影地：雁田山



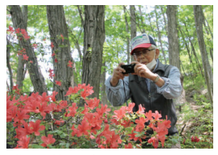
花を探すためには、先に葉を見つけてから根元に花をみつけるという順序になるでしょうか。根は細辛（サイシン）という漢方薬の材料になります。

・・・

No.99 新緑の雁田山に咲く「ヤマツツジ」の花

5月になると雁田山にヤマツツジの赤い花が咲き緑の中に映えていますが、その季節以外はほとんど意識されることはありません。花弁は漏斗状で先が5枚に分かれ、中に5本のオシベと1本のメシベがあります。雁田山で注意してみると、ヤマツツジは尾根筋に広がるアカマツ林の中に群生しています。この二種は尾根筋の岩場で乾燥しやすい所が育成環境であることが分かります。この状態を生態学ではヤマツツジ―アカマツ群集とし、群落の単位として分類しています。



1、2_ 新緑の中で映えるヤマツツジ 3_ 花の中にある5本のオシベと1本のメシベ
撮影日：5月25日(R2)　撮影地：雁田山



ヤマツツジは万葉集にも9首詠まれ、古くから園芸品種としても楽しまれてきました。

No.100 きれいな花には毒がある「クサノオウ」

クサノオウは、ケシ科の越年生草本（芽が出て2年目に花が咲く）です。雁田山の山裾やその付近の道端で見ることがあります。茎は柔らかな感触で、折ると黄色い液がでてきます。この黄色い液は有毒で、21種類のアルカロイドを含んでいます。有毒植物ですが、かつては皮膚病の薬用として利用されていたこともあります。名前の由来は、黄色い液が出るので「草の黄」、皮膚病（クサ）に効果があることから「クサノオウ」、また「草の王」などがあります。毒草ですから、口にしないよう注意してください。





1_5～7月に黄色い花が咲きます
2_ 有毒の黄色い液
3_ 花と実

撮影日：6月29日(R2)
撮影地：雁田山



No.65のタケニグサもケシ科で有毒の汁が出ました。ケシ科は各種アルカロイドを含み有毒なものも多いです。

・・・

～おぶせ自然暦　連載100回を迎えて～



自然の植物は「手に取るなやはり野に置け蓮華草」のとおり、植木鉢ではなく自然に置いて輝くものです。雁田山は小さな山ですが、その中にあふれ出る宝を秘めた宝の山です。小さな花ひとつ木ひとつ、紹介しているうちにあっという間に9年間100回を数えてしまいました。これだけ長く続けてこられたのは、連載を楽しみにしてくださった皆様のおかげです。

時を同じくして、私個人が主催する自然観察会も平成13年5月の雁田山を皮切りに令和2年の7月に100回を迎えました。自然観察会の会報である「自然観察会通信」ではこう書いています。

> 観察会を終わりにする
> 時は、通知はしません。
> 通信が届かなくなった
> その時が終わりです。

この町報おぶせの「おぶせ自然暦」がいつまで続くか、それは神のみぞ知る。ですが、生涯自然案内人として皆さんに自然の素晴らしさを伝え続けたいと思っています。



おぶせ自然暦
four seasons in obuse

～雁田山の１年　あの花はいつ咲くの？～

２月　メタセコイヤ、アズマネザサ
３月　セリ、コオニタビラコ、ホトケノザ、ダンコウバイ、ミスミソウ、ヒメニラ、フクジュソウ、エドヒガン、ナニワズ
４月　ロトウザクラ、アブラチャン、アズマイチゲ、アカマツ、マルミノウルシ、ヤマコウバシ、フキ、キブシ、
マムシグサ、イカリソウ、コクサギ、マルバコンロンソウ、カラマツ（花）、スギ、サルトリイバラ、
ヤマブキ、エゾノコリンゴ、エノキ、ミヤマウグイスカグラ、ウラシマソウ、
ザイフリボク、ツノハシバミ、ウスバサイシン
５月　モミジバフウ、ハシリドコロ、ハンショウヅル、ミヤマナルコユリ、ウワミズザクラ、
ヒメアオキ、オニグルミ、オドリコソウ、ヤマツツジ
６月　スイカズラ、イボタノキ、ヒメコウゾ、クマノミズキ、サイカチ、ペカン、ナルコユリ、ニワトコ、
ノイバラ、マメガキ、ネコノメソウ、ノリウツギ、クリ、セキショウ、イワカラマツ、クサノオウ
７月　ヤマゴボウ、ムラサキシキブ、シモツケ、ヤマユリ、キツネノカミソリ、シオデ、ジャノヒゲ、オモダカ、
アギナシ、マタタビ、タケニグサ、イシミカワ、ニガクサ、ツルマサキ、イタチササゲ
８月　オオマツヨイグサ、ヤブカンゾウ、クサギ、ヤブタバコ、クコ、ヌルデ、オオブタクサ
９月　ヤマハギ、クズ、ガマズミ、ミゾソバ、オオミゾソバ、カワラケツメイ、ヤハズソウ
１０月　ススキ、オギ、クヌギ（どんぐり）、コシオガマ、クロウメモドキ、キヅタ、センボンヤリ、イヌタデ、
イヌタデ（アカマンマ）、ハナタデ、フユノハナワラビ
１１月　リュウノウギク、スイカズラ（実）
１２月　ヒイラギ、ヤブサンザシ

編集後記　（町報歴代担当者）

▼「おもしろき　こともなき世を　おもしろく　すみなすものは　心なりけり」大変なご時世だからこそ、自然に親しむことを通して心豊かに、おもしろく生きることの大切さを伝え続けてくださっているのだと感じます。清水先生には感謝の気持ちでいっぱいです。そして100カ月の連載おめでとうございます。これからも自然歴を楽しみにしております。（土屋）

▼汗だくになりながら雁田山を登ったり、粉雪舞う松川堤防を延々と歩いたり。「歩けば何かに出会えるね」。会話したことが何度もありました。しかし、どれも偶然ではなく、清水さんの自然に対する豊富な知識と経験、下見までしてくださっていたからこそ出会えた植物たちです。この100回の連載を植物との出会いの道しるべとして受け継いでいきます。（関口）

▼先生とご一緒させていただくようになり２年半になります。一番の思い出は去年の５月、ウラシマソウを探して雁田山を歩き回ったこと。あきらめて下山する途中で一つだけ見つけることができました。そして今年の夏、別の場所でウラシマソウの群生を発見しましたね。先生といると、たくさんの感動に出会えます。これからも先生が生きるこの世界のこと、たくさん教えてください。（塩野崎）

▼雁田山で一歩進むたびに次々と飛び出してくる植物知識の数々に、先生の事をこっそり心で歩く植物大図鑑と呼んでいました。普段、気にせず目にしている植物であってもいわれを知ると、見ている景色がガラッと面白いものに変わります。ぜひ、自然歴を片手に小布施の里山の豊かさを体感してもらいたいです。（祢津 ※担当時旧姓 井出）

▼清水先生、100号記念おめでとうございます。私事で恐縮ですが、大学で生物を専攻していたこともあり、先生と一緒に野山を訪れ写真を撮り、記事を作成している時間は本当に幸せでした。今後も体をお大事にして、町内に散在する宝物を伝え続けていただきたいと思います。（久保田）

▼初めての取材で「ダンコウバイ」の名前を教わった後のこと。それまで色のなかった早春の景色に、「黄色」が突然飛び込んで来た不思議な体験を思い出しました。植物の名前を知ると人生がちょっとだけ豊かになります。そんな気付きを教えてくれた先生との「宝物探し」は今でも通勤に散歩にと私の日常を彩っています。（大沢）

▼「にわか雨にあった太田道灌が、あばら家の少女に蓑を借りようとしたらヤマブキを渡されたから怒って帰った。後から『実の（蓑）ひとつだになきぞ悲しき』と言う歌があると家臣に教えられて無学を恥じたといわれる。でもヤマブキにも実はあって太田道灌の勘違いって呼んでいる・・・」雁田山に入ると始まる先生の授業を、一言コメントに再現してみました。併せてご一読ください。（須藤）

発行　長野県小布施町／編集　総務課
☎026―214―9100 ／ FAX026―247―3113
小布施町公式サイト・携帯サイト https://www.town.obuse.nagano.jp/
Eメール obuse@town.obuse.nagano.jp